

江ノ電が止まった日

福島敦子 ジャーナリスト

一日三時間、全く電気を使えない。それがどれほど大変なことか、東日本大震災後の計画停電で痛感した。停電のタイムスケジュールをチェックし、家事の段取りをする。冷蔵庫の生ものを保冷箱に移し、停電時間が過ぎるとまた戻す。電灯が点かないなかでの調理は思った以上に大変で、工事現場で使うようなヘッドライトをつけてキッチンに立った。停電中はトイレの水も流れず、これも電気で動いていたのかと、止まって初めて意識した。

鎌倉に住んでいるが、市民の足・江ノ電も一時期、動かなかった。仕事へ行くため仕方なくタクシーを呼ぶにも、停電中はGPSが使えないから配車できないという。信号機も消え、外で買い物や食事をする人もなく、商店街から人が消えた。電気を使えないと、家庭生活も仕事もままならない。それを思い知らされた二週間だった。

あれを機に、人々の節電への意識はずいぶん変わった。企業を取材していても、こまめな消灯はもちろん、できるだけ自然光を利用したり、残業する人が一カ所に集まってそっだけ灯りをつけるなど、さまざまな工夫が見られるようになった。街で、オフィスで、家庭で、あらゆる場で「もっと電気を大切にしよう」という流れができたのは、とてもいいことだ。

当時は、駅もデパートも照明は最低限。最初は暗さに驚いたけど、慣れると不都合はない。安全や快適性を損なわない程度に省エネすることは、考えてみれば当たり前。だけど時間の経過とともに、その意識が薄れている気もする。震災時の教訓を忘れては

でんき * STORY

ならない。

夜も明るい東京に比べ、鎌倉では星がきれいに見える。寺社も多く、ある夜のイベントでは灯籠の灯りに読経の音が流れ、まるで鎌倉時代にタイムスリップしたかのような神秘的な感覚を味わった。夜には夜の、闇には闇の美しさがある。

自宅では間接照明を採り入れている。但しそれは節電への義務感というよりも、時間帯によって生活空間を演出する楽しさから。日本人はもともと自然を楽しみ暮らし方に長けている。震災後、計画停電では土鍋が注目された。ご飯を炊くのに少し不便かも知れないが、おこげができて意外においしかったりする。そのような昔ながらの生活道具も、不便と感じるか、楽しさを見出せるかで意識は変わる。電気のありがたみに感謝し、大切に使う一方で、電気を使いすぎない暮らしの楽しみ方も見出したい。

とはいえ、電気がなければ、ビジネスも家庭生活も機能しない。災害の多いこの国で、どんなときにも電気が安定的に供給されるのが、いかに大変で、かつ大切なことか。二週間の計画停電で、それは身に沁みた。電気の安定供給は社会の基盤だ。今後も途切れることなく電気を届けてもらえることを期待したい。



ふくしま あつこ
ジャーナリスト
津田塾大学学芸学部卒。NHK、TBS、テレビ東京で報道番組・経済番組のキャスターを担当。これまでに500人を超える経営者を取材。ヒューリック社外取締役。パナソニックの経営アドバイザーを7年に亘り務めた。著書『愛が企業を繁栄させる』など。
<http://www.atsuko-fukushima.com/>



©Takaaki Motohashi/gettyimages